

行動発達の比較研究からみた hominization の問題点—ニホンザルの群れ落ちを例に—

糸魚川直祐（阪大・人科）

私がおもにたずさわっている心理学の研究で、これまで hominization がシンポジウムの問題として論議されたことはないと言ってよい。心理学では、人間や動物の行動のメカニズムを探るが、それは比較的短い時間軸で刺激と反応の結びつきを調べるのであり、進化の過程という長い時間軸で行動の変容を取り上げるのではない。例えば、心理学は人間や動物の言語的活動や、道具使用の行動を取り上げ、その行動の時間的な発生機序を明らかにしようとするが、そこで問題になる時間軸は、多くの場合個体発達の過程であり、長くとも数世代の間のことさらにすぎない。

hominization というきわめて長く、もはやわれわれが間接的にしかその軌跡をたどることができない事象を研究する分野と、心理学のように現存の人間や動物を用い、再現可能な実験方法により、行動のメカニズムを短時間軸で解明しようとする分野は、もともと別個のものである。このことは自明のようであるが、実は研究者の間でも混乱やすりかえがあるように思われる。例えば、現存のいく種類かの霊長類の言語的活動や道具使用の行動を比較することにより、hominization の過程が明らかになるという誤解がある。心理学の研究結果のみによって、いろいろちがった動物の言語的活動を比較し、体系的に並べると、それは系統進化にもとづく動物学上の分類と一致しない。だからと言って、われわれはイルカを霊長類に入れるようなことはせず、心理学の研究結果を系統進化の体系のなかで位置づけようとする。

心理学者が hominization を取り上げないのは、心理学の研究方法では hominization を解きえないからであるが、心理学以外の研究者は、きわめて大胆に心理学の研究結果を hominization の解明に利用しようとする。このことは、それ自体非難されるべきではないが、hominization を直接解明できる分野と、できない分野とをはっきり区別し、両者の間で概念の混同やモデルの誤った借用を避ける必要がある。そうしなければ、本来つながらない事象を無理に関連づける危険性が生ずる。

このことは hominization を拡大解釈し、hominization を現存の人類の持つ特質の総体ととらえ、現存の霊長類の特質と比較する場合にも生ずる。私は人類の系統進化の過程について hominization を論ずることはできないから、hominization を上記のように拡大解釈し、その枠組のなかで hominization をとらえることにする。そして、

現存の霊長類と比較することによって、人類の特質を明らかにすることがいかに困難であるかを指摘したい。

人類では、未成年から成年に移る時期は、一般に青年期といわれ、身体の成長や心理面での変化、さらに、かれらが社会のなかで占める位置などを考慮すると、青年期は人類にだけ特徴的にみられる発達の時期といわれる。そこで、青年期を性成熟の徴候が現われてから、実際の繁殖活動が始まるまでの期間とし、このような時期が他の霊長類にもあるかを検討してみよう。

霊長類に限らず多くの哺乳類は、性成熟の徴候がみられると、直ちに繁殖ができるのではなく、繁殖活動の開始は時期的に少し遅れる。性成熟の徴候があってから繁殖が始まるまでの期間は、青年期不妊の期間といわれ、多くの人の研究結果によると、ほとんどすべての哺乳類に認められるといわれる。

人類における青年期不妊は、身体面での繁殖能力の未成熟さや不適合さによるばかりではなく、社会的条件の抑制によることが多い。このような社会的条件の関与が、人類の青年期の特徴とされているが、霊長類の場合でもこのような社会的条件が関わっていることは言うまでもない。したがって、ただ単に青年期不妊の有無や、それを規定する大まかな条件だけでは、人類の青年期を他の霊長類の場合と区別し、それを人類の発達時期の特質とすることはできない。

次に、問題をやや具体的に、ニホンザルが未成年から成体になる過渡期に、特徴的に現われる行動の一つとして、オスの群れ落ちについて検討してみよう。

私が観察している岡山県真庭郡勝山町神庭流付近にすむ餌付け自然集団（勝山集団とよぶことにする）を例にとると、1958年の餌付けから1972年までの15年間に、計約220匹のオスが生まれたが、1972年10月現在で集団にとどまっているものは計約84匹で、他は集団からいなくなっている。いなくなったもののなかには、集団内で生活しているうちに死亡したと思われるものもいるが、大多数は群れ落ちしたと考えられる。1972年10月現在で、1才までのオスは全員集団内にいるが、2才までのオスは15匹中2匹、3才までは23匹中4匹、4才までは18匹中8匹、5才までは13匹中6匹、6才までは13匹中8匹が集団からいなくなっている。6、7才になるといなくなったオスの数はさらに増え、8、9才ではそれぞれ2匹しか集団にとどまっていない。勝山集団のリーダーは10才（1962年生まれ）で、この年令では集団に残っている唯一のオスである。リーダーより年長のオスは、推定15才のが1匹、推定13才のが2匹いる。

このように4才から6才頃までには、オスの約半数が集団からいなくなる。この年令はオスが性的成熟に達する頃であり、一般的には群れ落ちはこの頃に多く現われ

るといえる。しかし、すべての群れ落ちが、未成体から成体に移る時期に現われるのではない。かれらはごく幼い頃を除き、ほとんどの年齢でも集団から離れる。したがって、群れ落ちをサルの子年期に特徴的な現象とみることはできない。

かれらが群れ落ちをするときの状況はさまざまである。仲間との関係について群れ落ちの状況を調べると、4才頃までのものは年長者と一緒に、4才頃から6才頃のものは同年輩の仲間と一緒に、それ以上のものは若いオスをつれたり、単独で集団から離れることが多い。しかし、これにも数多くの例外があることは言うまでもない。また、群れ落ち前に、順位を逆転されることがあるが、また逆転されない場合も多い。

私は群れ落ちをするサルは、母ザルとの関係で予測できるのではないかと考え、数年間にわたり母と子の関係を追跡観察してみた。オスの子と母との結びつきは、メスの子と母との結びつきより一般に疎遠であり、この傾向はすでに子が生後2、3カ月の頃から認められる。オスの子は生後1年を過ぎると、さらに母から離れ、同年輩のオス仲間と行動を共にすることが多くなるが、なかには母との密接な結びつきが持続するものもある。このように母との結びつきが密接な子で、同年輩のオス仲間が群れ落ちしても、集団にとどまっているものがある。しかし、母との関係だけで群れ落ちをするかしないか、

またその時期はいつかを予測することはできない。

このように、オスが集団から離れていく現象を一つとっても、それに関わる条件は複雑で、群れ落ちを単にサルが未成体から成体に移るときに特徴的に現われるものとしてかたづけることはできない。このことは人類の場合でも当てはまる。人類において、青年とか青年期とかいうものを、行動上のあるいは心理的な特性によって、また社会的な特性によって、はっきりと取り出すことはたして可能であろうか。人類の種に固有な特質を、行動や生活の諸相にわたって規定することはきわめてむづかしい。一般には人類の個体発達の特徴とされる青年期も、その実体はあいまいである。そして、これを霊長類の発達過程にみられる現象に対比させ、人類の特質を究明しようとしても、あいまいさは少しも解消されない。

hominization を現存の人類の持つ特質の総体とし、それを現存の霊長類の特質と比較して解明するには、われわれは人類についても霊長類についても、きわめて乏しい知識しか持ち合わせていない。知識が豊かになってからでないと hominization を論議できないとするのは誤りであるが、現在では表面上の類似現象によって人類と霊長類とを対比させ、さらには、人類の系統進化の過程までを推論しようとする試みが、知識の乏しさを無視して進行しているように思われる。この傾向はとくに行動研究の分野において目立っている。